

東京都公文書館だより

Tokyo Metropolitan Archives News

第3号

【編集・発行】

東京都公文書館

平成15年9月発行

【印刷】

株式会社 三州社

- 所蔵資料紹介 - 公文書館の書庫から

『府治類纂』

明治10年(1877)東京府記録科編纂

冊数37冊(うち総目録2冊)



「早く整理しなくては」と思いながら書類を積んでおき、いざ必要なときに見つからずに閉口したという経験はないでしょうか。

事情は、今も昔もかわりません。明治維新によって江戸幕府が倒れ東京府が誕生して以来、行政の変化はめまぐるしく、各部局で大量の書類が作成され、数年後には府が出した通達の年月日や具体的内容がわからなくなってしまうことも少なくありませんでした。明治7年(1874)政府は各府県の沿革調査を命じ、東京府も「東京府史料」という精細な報告書を提出しましたが、すでに年月日不明とか詳細不明という記載が散見されます。

このような状況のなかで、明治10年(1877)1月15日記録科編修官が置かれ、文書の整理・編修が精力的に行われるようになりました。ここでご

紹介する「府治類纂」は、「明治元年ヨリ五年ニ至ル法令格式ノ類抄」(「明治十年理事年表」)、すなわち、明治初年の公文書を、布令、会計、警備・消防、社寺など26テーマにわけて37冊にまとめたものです。この時期の東京府行政を知りたいとき、まずひもといてみる価値のある資料といえるでしょう。編集の中心にあった水戸出身の小宮山やますけ綏介は、その後、地理志を中心に府史編さんにあたり、慶応大学で教鞭をとり「古事類苑」(明治期の官撰の百科事典。1,000巻。明治40年完成)の編さんにも従事しています。

「府治類纂」は、このように府行政にかかわる文書を集めたものですが、当時の世相や社会のあり様を示す興味深い文書もたくさん含まれています。今回はその中から、激動の明治維新を乗り切っていくために“豚”に賭けた人々をご紹介します。

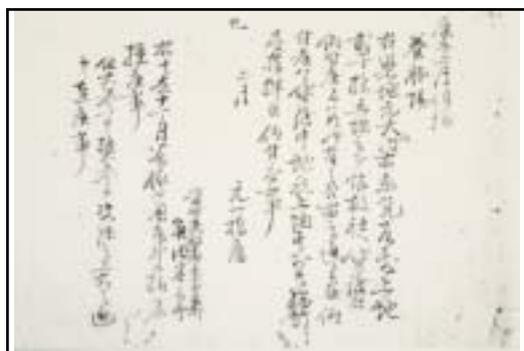
「身を捨てて皇国に仕える豚」

一橋慶喜(後の15代将軍徳川慶喜)は豚肉が大好きだったので「ブター」というあだ名があったことは有名です。その一橋家に仕えていた角田米三郎は、明治2年(1869)協救社という組織をつくり養豚事業を始めました。協救社に出資すれば、養豚によって出資金が3割の利付きで戻ってくるというのです。角田が同社の宣伝のために発行した「協救社きょうきゅうしゃ衍義えんぎ草稿そうごう」第2号(『明治文化全集』24巻)には、飢饉の際に上流の人々に五穀を供し庶民が牛羊豚を食すれば国家のためになり、「食牛羊豚の、命を捨て身を抛ちて天皇に仕え、飢饉に万民を助くるは、禽獣の大忠」とまで述べられており、角田が養豚事業への理解と出資を熱心に呼びかけた様子がかがえます。

このような、短期間に3割の利益が上がるといういささか眉唾の趣も感じられる協救社養豚事業に多くの協力者が現れたのは、角田の宣伝だけでなく、政府と東京府が協救社を保護し、角田が「民部省養豚御用掛」として活動したことにもよるでしょう。明治3年(1870)初めには、協救社に対して大河内右京亮屋敷跡地2,015坪(現在の築地2丁目)等が養豚場として下賜され、養豚事業は「官許」によるものとなったのです。町々には、市中の腐敗物や米麦の洗い水まで集めて養豚飼料とするよう触^{ふれ}が出されました。

「府治類纂十八 午 地輿」には、このような動きをうけて角田が東京府に提出した次のような願書が記されています。

この度、芝高輪教育所のなかに養豚御試行のための小屋設営をお許しいただき、・・・養豚御試行のために、金500両を賜わったうえ、使用見積もり書を提出するようご沙汰いただき有り難い幸せと存じ奉ります。しかしながら、協救社は協力同心による大富強の道を開くものでもあり、・・・御試行の結果しっかりとした見通しが立つまでは御下賜金はお願ひ申し上げない心積もりでございます。・・・(そのかわり)地税を上納するか払い下げにより東京市中の空き地一万坪を利用させていただければ、教育所に收容されている困民10人を養豚に従事させ、その生活も協救社で引き受けさせていただきたく存じます。



角田米三郎の出願取扱いについての起案書

この願書には、すでに長崎から種豚を取り寄せ、京都大阪はじめ各地の村々に飼育させている豚が800匹にのぼることなどが記されており、角田が相当の自信をもってこの事業に取り組み、またそ

のために土地使用などの援助を府に求めていることがわかります。

ピンチのときこそ人脈が大切

では、協救社の養豚事業は、なぜこのように政府や府の援助を得ることができたのでしょうか。

幕府が倒れた後、旧幕臣は、朝臣化(降伏して新政府に帰順すること)するか、静岡藩に無禄で移住するか、農民や商人になるかが迫られており、新政府の役人として生活の途を得られる者も多くはありませんでした。「府治類纂」には、旧幕臣の子弟が道ばたで袖乞をしているといった状況を述べた記事もあります。角田自身、御三卿(徳川一族)のひとつ一橋家に仕える身分でしたから、版籍奉還によって一橋藩が廃絶された後、何によって生きていくかは重大問題だったことでしょう。

角田が協救社による養豚事業を開始した直接のきっかけは不明ですが、旧幕臣グループのなかには、新政府にその事業の支援を働きかける動きがあったようです。

たとえば、当時新政府内で大きな力をもっていた大隈重信との縁故をたより、民部省監督司の役人として新政府に出仕した旧幕臣の田中廉太郎という人物は、大隈に当てて次のような献策を行っています(早稲田大学図書館所蔵大隈文書)。

一般協救社養豚場などが許可され、東京市中には町触^{まちぶれ}なども出されましたが、藩や県には、まだ布令など出ておりません。東京の町触にならって藩県に布告が出されれば、ゆくゆく大きな収益を上げるものになると考えます。

これが功を奏したのかどうかはわかりませんが、旧幕臣グループのネットワークが社会の激変に対処していくうえで活用されたことは、間違いのないでしょう。協救社の事業は、しばらくは爆発的な人気をよびましたが、明治6年(1873)頃には、「方今すこぶる衰敗に至り、土崩瓦解^{どほうがかい}の勢いなり」(『東京市史稿』市街篇 55)と衰退していったようです。角田のその後の消息はよくわかっていません。

「府治類纂」は、当館所蔵の多くの明治期資料のなかで目立った存在ではありません。しかし、維新期の東京の実相を知るうえで、さまざまな手がかりを秘めた魅力のある資料だといえるでしょう。

江戸開府400年記念事業 東京都公文書館所蔵資料展
「千客万来世界都市の系譜～名所が語る江戸・東京の歴史」をめぐって

はじめに

平成15年10月6日(月)から10日(金)までの5日間、都議会議事堂1階北側の都政ギャラリーにおいて、上記のテーマで所蔵資料展を開催します。

東京都は平成13年11月に「東京都観光産業振興プラン」を策定し、「千客万来の世界都市・東京」をめざして新たな発想の取組みを開始しました。それは観光を産業として位置づけた政策展開を図るもので、東京の魅力を世界に発信し、外国人旅行者を5年で倍増させようという目標を掲げる一方、新たな魅力ある観光資源の開発を目指しています。

このような機会を捉え、都民の皆さんとともに、江戸・東京という都市の「名所」を振り返り、東京が有している観光資源としてのポテンシャルを再確認することにも意義があるでしょう。

そして、そのような歴史と現在をつなぐ、歴史的資料の大切さに思いを寄せていただければ幸いです。

ここでは、所蔵資料展の準備を進める中で浮かび上がった、江戸・東京の名所に関するいくつかの話題や史料を紹介します。

勤番武士の江戸遊びめぐり 酒井伴四郎日記

地方から江戸を訪れた人の記録から、当時の名所・観光スポットを探ってみることにしましょう。所蔵資料展では現在の山形県寒河江から伊勢参りの道中江戸に立ち寄った人物の精力的な名所めぐりをたどることになりますが、ここでは幕末の万延元年(1860)紀州から江戸に公用でやってきた紀州藩衣紋方(衣服担当部局)の下級武士酒井伴四郎の記録に着目しましょう。彼にとって、江戸の様子は見るもの聞くもの驚きの連続で、その感想を細かに日記に書き記しています。以下、その一部をご紹介しますことにしましょう。

「六月朔日……大名小路え行、諸大名之屋敷一見致、余り暑き故照り降り傘巻本叔父様と買、又大名登城下り見物二参り、幸上之帰御拝し、其勢飛鳥之落る計り也、諸大名小名之下り誠二目を驚

ス……」。諸大名が集まる唯一の土地、江戸では、大名屋敷や大名行列は見物の対象でした。

「廿五日……直助二髪結い貫、叔父様・予・為吉同道にて、赤羽根之有馬之屋敷見物、薩摩ノ屋敷見物、其所予犬之くそふむ、夫ヨリ芝田丁高輪泉覚(岳)寺へ参り、赤穂家臣四十七人之墓へ詣り、為吉八品川之間屋へ行、其間二茶屋へ這入一盃呑、大二高し、夫ヨリ日影丁へ行、着物巻枚買、又芝へ行、小道具帰り懸岩水屋にてどぜう鍋・すし杯買、帰着……」。赤羽(現港区)の有馬家屋敷(火の見櫓が有名)・島津家屋敷を見物します。しかしそこで犬の糞を踏んでいます。「江戸に多きもの、伊勢屋、稲荷に犬の糞」という言葉があり、屋号に伊勢屋、祠に稲荷、動物に犬、というのが江戸の特徴でした。伴四郎もここで江戸の洗礼を受けたようです。気を取り直して赤穂浪士の墓に参詣。茶屋に入って一杯飲んだが「高し」と不満、しかしその後どじょう鍋・すしを買います。

「十七日……兩人(伴四郎・為吉)にて芝へ行、愛宕山へ参詣いたし、世間を見渡し、江戸三分一八愛ヨリ見ゆる、其広さは中々詞二も筆二も尽しがたく候、夫ヨリ増上寺え参詣いたし、其寺内之広さ、寺之内と八不被思候、通り抜ケ、扱諸道具・錦絵・其外細工物、諸事何やかや商店之賑ひ驚目候……」。愛宕山は江戸を見渡すのに絶好の場所でした。「江戸は三分の一みえ、その広さは言葉にも筆にもならない」と語っています。増上寺を通り、商店の賑わいをみて目をみはります。



愛宕社総門(『江戸名所図絵』巻三)

有馬家屋敷・赤穂浪士の墓・どじょう鍋・愛宕山等々、伴四郎の見物先は江戸見物の定番でした。ほかに、美人の常磐津師匠のもとに通ったり、開帳や見せ物を見物したりと、武士のわりにはユーモラスな行動をみせています。なお、この伴四郎の日記は林英夫「単身赴任下級武士の幕末『江戸日記』(『地図で見る新宿区の移り変わり 四谷編』、新宿区教育委員会、1983)で翻刻紹介されています。

外国要人案内記、明治38年の東京名所

東京都公文書館には東京都の前身である東京府・東京市の公文書が引き継がれています。東京府文書は慶応4年(1867)から昭和18年(1943)に至る約22,400冊、東京市文書は明治22年(1889)から昭和18年までの約12,100冊を数えます。近代の東京の歴史を明らかにする貴重な史料がこれだけ膨大に存在しているのです。

今回の所蔵資料展でも、これらの公文書の存在を広く知っていただきたいと考えていますが、そのために「千客万来世界都市の系譜」にふさわしい史料として、東京市が外国からの要人を迎えた際の準備から事後処理に至る一連の文書を展示します。

ここではその中から「明治三十八年 英国支那艦隊司令長官ノーエル大将並乗組員全部歓迎書類」を紹介しましょう。尾崎行雄市長以下、東京市を挙げた歓迎行事の様子を示す公文書70件が綴じ込まれています。

明治38年(1905)10月12、13日、日比谷公園内において歓迎の園遊会が開かれました。このため横浜から新橋の間に特別列車も運行されています。園遊会のプログラムは以下のとおりです。

午前十時		園遊会開始
正午十二時	信号 ^{ラッパ} 喇叭	市長歓迎ノ辞
	右終テ食堂ヲ開ク	
午後四時		園遊会閉鎖
余興		
奏楽	煙火	
球乗	(午前九時三十分ヨリ午後四時迄)	

撃剣	(午前十時三十分ヨリ正午迄)
柔術	(同上)
相撲	(午後一時ヨリ午後四時迄)

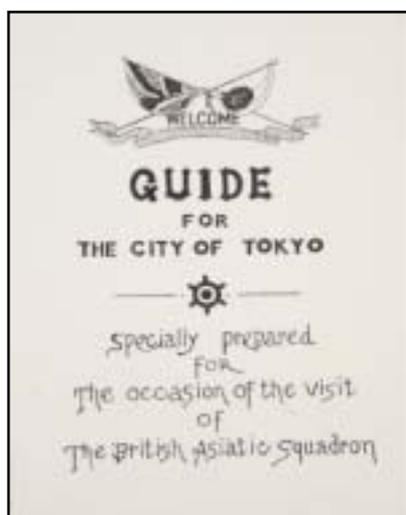
また園遊会終了後は「紅葉館」において将校を招待しての晩餐会が開かれ、市長以下、市議員、市参事会員らが出席して接待に当たっています。

さて、一連の歓迎行事史料で興味深いのは、司令長官以下、乗組員たちの「観覧」のため、東京市の要請により特に拝観を許可され、あるいは無料にて随意に遊覧可能となった「観覧場所」が列挙されていることです。明治38年当時、東京市が自ら選んだ外国人向けの「おすすめスポット」というわけです。相手が軍人ということに対する配慮は窺えるものの、なかなかバラエティーに富んだ場所が選ばれています。今、その「観覧場所」を追ってみましょう。

浜離宮(皇室ノ貴賓等ノ饗宴ヲ供セラルル所ニシテ一般ノ拝観ヲ許サレサル所) 靖国神社(皇国ノ為メニ身ヲ献シタル忠愛者ヲ祀ル所) 遊就館(日清日露戦役ノ戦利品其他古来ノ武器等ヲ陳列ス) 九段パノラマ館(奉天会戦ノ状ヲ画ス) 大学附属植物園(大学ノ実験所ニテ花木アリ、又日本風庭園アリ) 大隈伯爵邸庭園 松浦伯爵邸庭園 大倉氏邸内美術館 上野公園内 動物園 博物館 上野パノラマ館(旅順口攻囲戦ヲ画ク) 日本美術協会(日本絵画其他器物ヲ陳列ス) 日本漆工会(国内各地ノ産出スル漆器ヲ陳列販売スル所) 白馬会(西洋画ノ展覧所) 浅草公園内 伝法院ノ庭園(名刹) 水族館花屋敷(諸動物、花木、造人形其他ノ観覧物アリ) 浅草パノラマ館(日本海海戦ヲ画ク) 電気館(電気諸器械模型及活動写真アリ) 丸一太神楽(戯技ヲ演スル所) 木馬館 珍世界(内外近古ノ奇物珍品ヲ陳列ス) 江川一座ノ玉乗・共盛館ノ玉乗(共ニ少年男女ニヨリ演セラルル玉乗軽業等ナリ) 都踊・浪花踊(共ニ女子ノ演技) 子供芝居 壮士手踊 剣舞 凌雲閣(十二層ノ塔ニシテ四方ヲ観望スヘシ) 四十七士ノ墳墓 愛宕ノ塔(山上ヨリ東京湾ニ

眺臨スヘシ) 淀橋浄水場(東京市水道ノ浄水場ナリ) サッポロビール会社ノ庭園 エビスビール会社庭園 高等師範学校内テニス競争后楽園(旧大名邸宅跡ニシテ日本各地ノ風景ヲ模セル庭園)

高尚な美術鑑賞、日本庭園の観覧から、浅草での大衆芸能まで、実に多様な「遊覧」「観覧」場所が準備されています。さらに東京市ではこれらのスポットの英語版解説を裏面に刷り込んだ案内地図(Guide For The City Of Tokyo)まで印刷配布しており、その綿密な歓迎ぶりが窺えます。



「案内地図」の表紙
(『明治三十八年 英国支那艦隊司令長官ノーエル大将並乗組員全部歓迎書類』)

ともあれ、千客万来につながる明治期の名所と、外国人歓待のホスピタリティーが、少々埃っぽい公文書の中から浮かび上がってきます。

大島への旅、大流行

右上の写真は大島の「三原山大滑走場」の様子。自然の斜面を利用した長い長いスロープの滑走光景は見るからに爽快そうです。

昭和初年、大島への旅は一つのブームとなっていました。昭和3年に「波浮の港」が大ヒット、三原山火口付近に「御神火茶屋」が設けられたのもこの年でした。翌年には東京湾汽船(現東海汽

船)が東京~大島に「日航便」を就航させ、客船の旅が人気を集めます。昭和6年、三原山に駱駝2頭とロバ11頭が放たれ、砂漠を横断するというエキゾチックな企画が人気を博すと、翌7年には読売新聞と東京湾汽船のタイアップによる読者無料招待企画が、大島航路人気に拍車をかけます。そして同10年、敷地面積3万坪に及ぶ大島自然動物公園の開園をみたその年に、大滑走場も設置されたのです。



三原山滑走場全景
(絵葉書『伊豆大島巡り』
樋口秀司氏 所蔵)

今回の所蔵資料展では、当館所蔵の近世史料や公文書により、江戸時代の伊豆諸島・小笠原諸島の様子、今日につながる物産の源流を紹介するとともに、伊豆諸島の資料収集家である樋口秀司氏ご提供によるパンフレットや絵葉書により、戦前期における島しょ観光の魅力を再現していきます。

依然として続く三宅島火山活動や新島・神津島近海地震等による観光産業への打撃は、大島・八丈島へも波及し、いまだその影響を断ち切れずにいるところです。そうした中、魅力ある観光復興への模索が続いています。また、豊かで貴重な小笠原諸島等の自然を保護しながら、新たな観光資源・産業を創出しようとするエコツーリズムの構築も目指されています。それぞれの島の個性を活かした観光創造への営みに、今回の展示企画がいささかでも寄与できれば幸いです。

目録検索システムのご紹介

当館では、これまで、紙で作成された目録を中心に各種資料をお探しいただいておりましたが、この4月からパソコンを利用した目録検索システムを閲覧室内に導入いたしました。

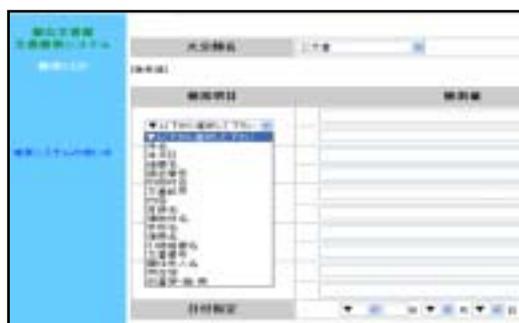
紙目録では、作成年月日や作成組織などの重要なキー項目が不明な場合、検索に多大な時間と労力を要し、それでも結局見つからないというようなケースも見受けられました。新たなシステムでは、データベースが得意とするキーワード検索機能を活用することにより、資料の有無判定の迅速化など、資料の検索効率が大幅に向上しています。

簡単な操作例を以下のとおりご紹介します。

まず、大分類メニューである「公文書」、「庁内刊行物・図書」、「史料」、「公報」、「地図、江戸図」、「旧地番目録」、「簿冊目録」の中から目的とする資料群を選択します（下図）。



次に、で選択した資料群に関する検索項目を「書名」、「年号」、「主務課名」、「利用可否」、「著者名」、「出版社」、「目録名」、「写真表題」の中から最大5項目をメニューから選択します（右上図）。



さらに、各検索項目に書名（件名）などの値をそれぞれ入力し、検索ボタンを押すと、その条件にマッチしたものが、下記のように検索結果一覧に表示されます。ヒット数が多い場合はさらに絞り込みも可能です。結果一覧から目的の資料を選び詳細をクリックして内容を確認します（下図）。



大分類の区分や検索項目の設定など、まだ試行の段階で使いにくい点も多いのですが、随時、改善を加え、より使いやすいシステムづくりを目指していきます。また、予算等の制約から、現在のところ閲覧室内のみの利用となっておりますが、今後は、インターネットによる検索も視野に入れた利用環境の向上に努めていきます。

- シリーズ -

もり
レファレンスの杜

地籍図とか公図といわれる地図は、閲覧できますか

地籍図とは

地籍図とは、土地一筆ごとの区画形状、地番、地目、面積を記入した地図のことをいいます。

明治22年（1889）年3月の土地台帳規則により土地台帳・土地台帳附属地図（公図）が作成され、郡役所、区役所に保管されることになりましたが、このうちの土地台帳付属地図が狭義の

地籍図ということになります。その後、昭和35年（1960）4月1日の土地台帳廃止により、現在では法務局に登録簿とともに公図として備えられています。

地租改正と^{こけん}沽券地図

旧来の地籍図は、明治初年の地租改正にともなって作成されました。私的な土地所有を認め、貢

租を地租（貨幣形態）に統一しようとするこの改革は、廃藩置県と併行して進められた維新改革の柱でしたが、その基礎は正確な土地丈量と地租算定にあり、その結果を示す地図も必要となります。

当館に残されている「東京六大区沽券地図」は明治6年12月、東京府地券課が地租改正事業にあたり、土地境界を確定し、将来にわたって紛争が起こらないようにとの意図で作成した貴重な地図です。これにより当時の大区小区ごとに土地一筆ごとの区画、所有者、土地面積、地券金額が確認できます。たとえば、第1大区第1小区宝田町3番は、5885坪、地券金額は金22469円、土地は岩倉具視の所有となっていました。これに対して第6大区第16小区深川木場町18番は、栖原角兵衛という人の所有地で、2959坪余、700円と記されています。

盛り込まれている情報からすればまさに地籍図なのですが、当時は「沽券図」と称されていました。江戸の町屋敷のうち永代売買を許された土地を沽券地といい、そこでは土地一筆ごとに所有者と沽券額を記した沽券帳が作成されていました。

ここから「沽券にかかわる」という言葉も生まれたのですが、明治6年段階ではまだこの江戸時代以来の用語が地図名に反映していたのです。

民間の発行地図

公的な地籍図として区役所や郡役所、のちに法務局に残されてきた地籍図に対して、同様の内容を盛り込んだ民間発行の地図が数次にわたって刊行され、一般の利用に供されてきました。当館で閲覧可能なものを紹介していきましょう。

(1)「土地宝典」

明治44年（1911）から大正2年（1913）にかけて、「土地宝典」という地籍図が、金洪舎という民間書房から発行されました。町名、土地の地番、等級、地価、土地の面積、所有者が記載されています。

(2)「東京市及接続郡部地籍台帳・地籍図」

大正元年（1912）に東京市区調査会から発行されたものです。同台帳には町名・地番・地目・等級・坪数・地価・所有者住所・所有者氏名が記載されています。

(3)「地籍台帳」「区画整理地番変更後東京市区地籍図」



土地宝典



東京市及接続郡部地籍図

昭和7年（1932）から昭和14年にかけて内山模型社から発行されました。地籍図には、町名、地番の記載が、地籍台帳には町名・地番・地目・面積、地価・土地賃貸価格、所有者住所・所有者氏名が記されています。等級の代わりに地価が表示され、土地賃貸価格が追加されているのは、賃貸の需要が多くなったことの現れでしょうか。

関東大震災後の区画整理による地籍の変化状況を把握するのに貴重な情報となっています。

(4)「土地要覧」

戦災による変貌を経た東京都区内の地籍を一目瞭然にし、後日の記録資料とすることを企図して、不動産調査会により企画されました。しかし、残念ながら計画通りの刊行に至らず、中央区のみが残されています。

閲覧利用をどうぞ

前述したように、法的な意味での地籍図＝公図は法務局で閲覧ということになります。本稿では一般的な地籍図の内容を有する当館所蔵の地図類について簡単にご紹介してきました。一部は原本保護の必要からマイクロフィルムや紙焼製本での閲覧となりますが、いずれも詳細な情報を含む貴重な土地の記録です。どうぞ閲覧利用の機会をお作り下さい。

東京都公文書館所蔵資料展のお知らせ

第4回目になる東京都公文書館所蔵資料展を下記の要領で開催します。本年度は江戸開府400年記念事業の一環として企画したものです。

テーマ	江戸開府400年記念事業 「千客万来世界都市の系譜～ 名所が語る江戸・東京の歴史」
期間	平成15年10月6日(月) ～10日(金) 10:00～16:30
会場	都政ギャラリー (都議会議事堂1F) (入場無料)

3頁以降に、今回の所蔵資料展に関連する記事を掲載したところですが、ここでは改めて展示の構成と主な見所を紹介しましょう。

大江戸案内記の世界

首都東京の新名所

東京の島々と観光・物産

都政PRコーナー

- 千客万来の世界都市・東京をめざして

コーナーでは当館所蔵の江戸ガイドブックの数々を、一堂に展示します。仮名草紙的なものから実用的なガイドブックへ、さらにビジュアルな構成へと発展した江戸の案内記の数々により、当時の名所とそこに集う人々の姿をたどります。

コーナーでは明治期の首都東京の名所を紹介します。近代公園の成立と展開、明治40年に開催された東京勸業博覧会という大イベント等に着目し、開化と伝統が織りなす明治東京の観光名所を再現しています。

コーナーは東京の島々、すなわち伊豆諸島・小笠原諸島に関して、江戸期の島々の記録、伝統的産業の歴史を紹介し、さらに昭和戦前期にブームを巻き起こしていた大島を中心とした観光の様子を、興味深いパンフレットや絵葉書によって再現していきます。

コーナーは、東京都が進める観光産業振興プランの実現に向けた取組を紹介します。島しょ振興公社の協力を得て、島の物産を紹介するコーナーも設置します。

会場で配布するリーフレットも作成中です。ぜひご覧下さい。

利用案内・交通案内

【利用案内】

開館日時

・月曜日から金曜日まで(9時～17時)

休館日

・土曜日、日曜日、国民の祝日及び振替休日

・年未年始(12月28日～1月4日)

・臨時の休館日として公示した日

閲覧停止日

・奇数月の第3水曜日(祝日の場合は翌日)

【所在地】 〒105-0022

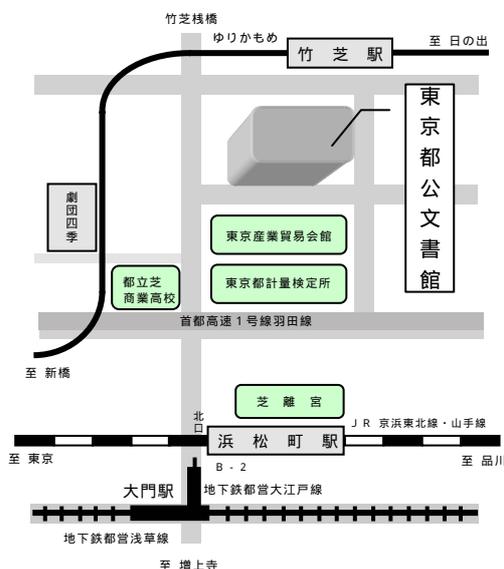
東京都港区海岸1-13-17

【TEL】 03-5470-1333

【FAX】 03-3432-0458

【ホームページ】 <http://www.soumu.metro.tokyo.jp/01soumu/archives>

【案内図・交通機関】



JR「浜松町」駅北口(新橋方面)下車(徒歩7分)

地下鉄都営大江戸線浅草線「大門」駅(B-2)下車(徒歩9分)

東京臨海新交通(ゆりかもめ)「竹芝」駅下車(徒歩2分)

都営バス「竹芝棧橋入口」下車(徒歩0分)
[浜95東京タワー品川車庫]

都営バス「竹芝棧橋」下車(徒歩2分)[虹01浜松町 国際展示場駅]